

第二回ふくふく童話大賞「大賞」

つきよ 月夜のマーウ

おばあちゃんと散歩さんぽにでかけると、猫ねこのマーウついてくる。
マーウというのは、うちで飼かっている猫ねこの名前なまえで、名づけ親おやはおばあちゃんだ。小さい頃ころ、近所きんじよからもらってきたのだが、五匹ごびきう生まれた中なかで鳴き声なごえがマーウ、マーウと変わかっていたので、おばあちゃんがこいつに決きめてもらってきた。名前なまえをつけるときもマーウにしようとおばあちゃんの一言ひとことで決きまった。ボクはけっこうこの名前なまえが気きに入いっている。マーウは

どう思おもっているのか知しらない。

散歩さんぽに行くいときは、おばあちゃんと手てをつないで歩あるくのだが、おばあちゃんの手てはとても柔やわらかくて、とても気き持ちいい。できたてのおもちのようでもあり、マーウの手てのひらのプヨプヨにも似にている。猫ねこのマーウの手てのひらの四個よんこのプヨプヨもやわらかくて気き持ちがいい。

おばあちゃんの手ては、それ以外いがいにもとてフシギだ。カーサーじょうずーチーのおもちをカーサーから上手じょうずにむいて食たべる。ぼくはそれができないので、そんけいしている。

それから、おばあちゃんはカンプーというのを結うのだが、それをそばで見ているのがとてもおもしろい。髪の毛の長いおばあちゃんは、まず髪の毛をくしですいて、頭のとっぺんでひとつにましとめる。それを髪の毛の根もとでくるっとひとつ輪をつくり、残りの髪を輪の根もとに巻きつける。そして、その巻きつけたところをおさえ、くるっとくった輪をかぶせ、そのあとにべっ甲のジューファーをさす。でき上がるまでの作業がとてもフシギで、見ているのがとてもおもしろい。おばあちゃんは、そういうボクを見て、少し得意そうに笑う。

おばあちゃんの手はもつとフシギだ。ボクがおなかが痛くなつたとき、おへその中に温めたお塩を入れて、上からテープをはり、ボクのおなかの上に手をおいてずっとおなかをさすってくれた。おばあちゃんの手のひらのプヨプヨが気持ちいいのと、あつたかいのとでボクはいつのまにか、おなかが痛いのが直つていたことがある。

ボクとおばあちゃんには、二人だけのヒミツがある。食パンを食べるときボクは牛乳で、おばあちゃんはコーヒーといつしよに食べるのだが、そのとき、パンを牛乳やコーヒーに少し浸してベロベロにしてから食べる。ボクとおばあちゃん

は、これが食パンの一番おいしい食べ方だと思っている。

だけどもある日、その食べ方をお母さんに見つかり、お行儀が悪いとこっぴどくおこられた。だからそれからは、お母さんに見つからないように、おばあちゃんとこの食べ方で食パンをベロベロにして食べている。これが、ボクとおばあちゃんの二人のヒミツである。

ボクとおばあちゃんと猫のマーウの二人と一匹の散歩は、近所を探検するのだが散歩の途中、いろいろなものを見たり、観察したりする。

ボクはある時、家の玄関や門の上にいるシーサーを観察し

た。左と右ふたつでひとつのセットになっている。色もいろいろで、青いやつや茶色っぽいやつ、大きいのも小さいのも、そして、ほとんどがこわい顔をして家の外をにらんでいる。そして、左のやつは口を閉じて、右のやつは口を開けて外をにらんでいる。ボクはおばあちゃんに聞いた。

「どうしてシーサーはこわい顔をして門の上にすわっているの？」

おばあちゃんは言った。

「シーサーは家の入口にいて、この家に悪いものが入ってこられないように、ずっとこわい顔をしてこの家を守っている

んだよ。」

ボクはなつとくしながら歩いた。おばあちゃんはいろいろなことを知っている。だから散歩の途中二人でいるいろなものを見つけるのはとても楽しい。

歩いていると、耳の欠けたシーサーを見つけた。こわい顔をしているけど、少しかわいそうな気がした。おばあちゃんに言うと、おばあちゃんはそのシーサーの耳をなでた。ボクのおなかが痛い時にしてくれたように、やさしくシーサーの耳をなでた。ボクは、シーサーもボクのように直るといいなあと思った。隣の家のシーサーは素焼きのシーサーだ。だけ

ど。口の開いたほうのシーサーの前足が片方だけ割れている。散歩の帰りにおばあちゃんとボクは、お隣りのシーサーの前にいた。おばあちゃんは、このシーサーもやさしくなでながらボクに言った。

「シーサーはね、前足が割れてしまっても、耳が片方だけになっても、ちゃんとそれぞれの家を守っているんだよ。いつでも強いシーサーだけど、夜皆が寝静まった頃になると家々のシーサーが集まってきて、楽しく歌ったり踊ったりして遊ぶらしいよ。おばあちゃんもまだ見たことはないけどね。」
と言った。

ボクはまたひとつ、フシギなことをおばあちゃんに教わった。

ある夜、ふと目がさめるとクーラーのかすかな音といっしよに、小さく小さく、太鼓の音が聞こえる。注意して耳をすますと、エイサーのリズムだ。

ハアイヤー、スリッスリッイヤーサツサイ・・・

そしてパーランクーの音や、楽しそうな話声。ボクはそっ

とベットをぬけ出した。いつもボクのそばで寝ているマーウに気づかれないようにそっと起きた。起きてうすぐらいあたりを見回した。猫のマーウはどこかほかで寝ているのか、ベットにはいなかった。

エイサーの音は庭の方から聞こえた。ボクはそっと庭へ出た。今にも落ちてきそうな大きな月が出ていた。まぶしいくらいに光りは庭の黒木やマンゴの木をくつきりと暗やみにうかびあがらせている。ボクは真夜中の景色を見たことがなかった。図工の時間に作った版画に似ていると思った。エイサーのリズムはだんだん大きくなっているようで、それは、

裏の広場から聞こえてくるようだった。ボクは、庭を出て裏の広場へ少し歩いた。月あかりがボクのまわりを明るく照らしていた。

広場へ近づくとボクはガジュマルの木の陰から声が聞こえる方へと目をこらした。そこは、月あかりがいつぱい集まっている場所のようで、目をうすく開けてよく見えるように目をならした。広場には小さな動物たちが集まり、歌い踊っているように見える。だんだん目がなれてきた。

「あつ！シーサーだ。」

広場にはボクが昼間よく見る近所のシーサーたちがエイサ

ーを踊っていた。青い色のやつや、うちの3軒隣の茶色のやつ、公園のそばの家の耳のとれたやつ、そしてうちの隣の家の前足一本のやつ。みんな楽しそうに踊っている。昼間見るこわい顔とはちがって、猫のようだ。猫といえはそのエイサーの輪の中に、見覚えのある顔がある。

「あつ！マーウ」

なんとボクの家猫のマーウもパーランクーをもってシーサーたちと踊っている。なんて楽しそうなんだろう。マーウは隣の家の前足一本のシーサーと腕をくみ、支え合いながら二匹で交互に足を上げたり、下げたりして楽しく踊っている。

年をとっているらしいシーサーには若いシーサーが腕をとり歌い、赤ちゃんシーサーはおばあちゃんシーサーにだっこされて踊っている。耳の取れたシーサーなんて片方の耳にはちまきをしめ、その指笛の上手なことつたら。

イヤーサツサイ、ハアーイヤー、スリツスリツ！

月あかりがスポットライトのように、シーサーたちを照らしている。エイサーの輪が動くたびに全部のシーサーを月明かりがやさしく照らす。そ

こに集まっているすべてのシーサーが主役で、歌い踊りそして笑っている。ボクはとても幸せな気分になった。そして、

マーウのことをとてもしいいやつだと思った。ボクはシーサーたちに気づかれないうち家へ帰った。そして、そつとベットにもぐり込んだ。マーウの寝る場所をちゃんとつくって・・

朝、目がさめるとマーウはもうどこかへ行ったようだ、た。ボクはゆう

べのことがあったので少し寝坊をしたようだった。

「おばあちゃん、おはよう」

「おはよう、けさは朝から何だか楽しそうだね。何かいい

夢でも見たのかい？」

「おばあちゃん、ボクきのう楽しいヒミツを作ったんだ。」

「ヒミツを作ったって？ふーん、牛乳づけのパンのヒミツより楽しいの？」

おばあちゃんはフシギそうにボクの顔をのぞきこんだ。

おばあちゃんとボクは散歩に出かけた。今日はとてもいい天気だ。風が気持ちよく吹いて、草のにおいを少し運んでくれる。深呼吸すると草のにおいといっしょに、きのう聞いたシーサーたちの歌声がどこかで聞こえるような気がする。おばあちゃんと二人でつくるヒミツも楽しいけど、ボクだけの

ヒミツもいいナと散歩をしながらボクは思った。きのうのことは、いつかおばあちゃんに話して、二人のヒミツにしようと思った。でも、そのときまではボク一人のヒミツにしようと思った。

「あいつ！マーウだ。」

おばあちゃんが言った。おばあちゃんの顔が向いている方を見ると、隣の家の門のシーサーの横で寝ているマーウがいた。それは、とても仲のいい友達のようなだとボクは思った。おばあちゃんが近づいてシーサーの頭とマーウの頭をなでた。ボクもシーサーとマーウをなでてやった。

二匹は笑ったような気がした。

中江 房子